

を表すると共に市民各位が弊社真意の存する所を諒解あらんことを切望する次第に御座候 敬具

大正十年七月二十八日

株式會社 川崎造船所

## 八、遂に流血の慘事を見る

争議團が神社参拜を運動の方策として取れるは最近に於ける罷業戦術史上の出色たるを失はず。元來無抵抗的抵抗を罷業の要旨とせる神戸争議に於ては、其對峙久しきに亘るや、結束を維持すべき方途に苦み、稍もすれば罷業團員をして我等何を爲すべきかの嘆を發せしめんとせり。

此形勢を望見せる大阪砲兵工廠の職工に依りて組織さるゝ向上會長八木信一氏は其派遣せる慰問使を以て神社参拜案を示したり。罷業中の神社参拜は、稍滑稽味を帯びるなしとせざるも、内實は禁止されたる示威運動を復活することにして、一の神社より他の神社へ長蛇の如く團体的進行をなすの妙案なり。争議團が直に採て以て用ひたるもの偶然にあらず。

争議團が参拜第一日を行ふや、縣警察部にては、素より之を好まざるものあり、警察部長の命を帯びたる保安課長は特に港川署に出張し、争議團代表として、神戸聯合會長野倉萬治氏の出頭を求め「神社参拜のため、乙社より甲社へ行列的行進を爲すは、穩かならざるのみならず、治警第八條に違反す

るものなれば、お互のため明日以後、一社づゝに制限さるゝ事を期待す」と懇談的に命ずるところあり。野倉氏は一應他の幹部に諮るべしとて引取り、同夜十一時過ぎ「二社萬拜は、幹部會に於ける既定の事實なれば今更如何とも爲し難し」と拒絶の回答をなせり。かくて廿九日の参拜は行はれしな

り。  
廿九日結束せる同盟職工は午前六時頃より生田神社に参集、七時には一萬三千名と註され神城一帯人浪と化したり。

聽て賀川豊彦、久留弘三兩氏以下一同隨意参拜、一齊に労働歌を高唱し、野倉萬治氏神前に額づきて祈願文を朗讀す。

此集團を機會に中村、灘、石橋、近藤の各幹部は神前演説を試み其の内一幹部は「中道通の角山春子といふ女子が神前に供へて貰ひたいとて緑の黒髪を根本から切つて争議團に贈つて來た」と其の黒髪を一同に示し聲涙俱に下る底の熱辯を揮ふや、参拜團中感極まつて嗚咽する者さへありたり。終つて一同「君が代」を合唱し、陛下の萬歳と労働者の萬歳を三唱し八時半三の宮神社に向へり。

「註」二十九日午前九時過ぎ川崎職工の参拜團が相生町の市電氣局附近へ差蒐つた時年頃廿四五の婦人が職工團の幹部の傍へ立寄り「私は仲町六丁目に住む川崎造船部の職工の妻で春子と云ひます。之を職工の皆様に見せて下さい」と紙に包んだものを渡し直に何處へか立去つた。包を受取つた一幹部はそれを開くと中には女の鬘々した黒髪を根本から惜氣も無く剪つて丸めたのと同じ通の手紙があつた。その手紙は左の通りで職工團を激勵したものでしたので幹部はそれを職工に示し意氣を鼓舞したと。